

二木 立 (著)

民主党政権の医療政策

藤谷順子 (国立国際医療研究センター病院リハビリテーション科)

総医療費の大幅引き上げのマニフェストを掲げて政権の座についた民主党の、その後の医療政策を分析したのが本書である。具体的には、2009年7月から2010年12月までの20の発表論文を、2011年2月に書籍として発行したものである。

著者の意見は、民主党の医療政策には、大きな二つのマイナス点があるというもの。一つは、民主主義的手続きの軽視、もう一つは、混合診療の解禁論の再燃である。一方、一般に政権交代の成果とされている2010年の診療報酬の引き上げは、実質的にはきわめてわずかであったことが示されている。総医療費の対GDP比をOECD加盟国平均値にというマニフェストは残念ながら実現されない見通しである。

従来の二木本のように、鋭い視点での着実な実証研究(実態の数字)を期待して読むと、ちょっとこの本は暗い。民主党政権の医療政策に関する、時々刻々の実証分析が集められている本書では、マニフェストの内容が実現されない一方で、医療ツーリズムや、混合診療などの案件が「医療の産業化」の旗の下に(再)登場してきた様子が総覧できてしまうのである。さまざまな人が、(ときには現場を知らずに)発言をし、新しい名前の会議が行われ、期待されたことが実行されない、その繰り返しの事実と迷走傾向に、読んでいる読者は疲れるのだが、著者にも「お疲れ様です」と申し上げたい。

では、このごく近い過去を記録した書籍の意義は何か。それは、監視すること(的確に反論すること)と、根拠に基づいた要望を積極的に出すことの重要性の再認識である。すなわち、「われわれはこんなに困っているんだ、だからリーダーがきっと何かやってくれるだろう」という他力本願ではこの国の医療や介護保険・福祉はよくならないということを

認識しなさい、ということである。ほかの山積した問題に優先順位(予算)をとられてしまうことすらある。いっぽうで、「営利団体による病院経営の解禁」のように、利益にからんで強く発言する者がいる項目はどんどん検討されてしまう、という事実も存在する。

本書は全体がその「監視」の書でもある。なかでも、混合診療原則解禁論については、著者は「なぜゾンビのように復活するのか」と述べて、「ゾンビ・バスターとしての覚悟」を宣している。

リハビリテーションについては、本書ではどちらかというと、調査研究に基づく政策提言の成果があがっている例として挙げられている。もちろん今後もその努力は続けられるべきであり、特に提言の必要な分野としては、維持期リハビリテーション、そして、医療と介護にまたがる部分でのサービス提供方法である。

なお第六章だけは、民主党の医療政策から離れ、川上武氏の医療政策・医療史研究の軌跡と現代的意義について述べられている。文系の学問における科学的な研究とはどんなことを指すのか、社会科学的な研究というものはどういうものなのか、ということに対する一つの回答例である。

われわれリハビリテーション関係者は、EBMも大事にし、かつ、EBMの手法では現在では示せない種類のことも大事にしないといけない。そしてまた、われわれの臨床は社会システムや医療政策と切り離せない関係にある。面倒でも、医療政策については考え続けていく必要がある。「がんばろう日本」は震災だけではない。

(A5判 208頁 定価 2,400円+税 頸草書房刊 2011)

訂正とお詫び

弊誌第 39 卷 7 号（2011 年 7 月号）713 頁，書評「民主党政権の医療政策」の発行元出版社の記載に誤りがありました。ここに訂正し，謹んでお詫び申し上げます。

誤「頸草書房」→正「勁草書房」

「総合リハビリテーション」編集室
